

永遠回帰 : 輪廻・再生の時間構造

タイトル(その他言語)	Ewige wiederholung : die struktur der zeit der metempsychose und plingenesis
著者	小浜 善信
雑誌名	神戸外大論叢
巻	53
号	5
ページ	57-74
発行年	2002-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001161/

永遠回帰 — 輪廻・再生の時間構造 —

小 浜 善 信

序 論

時間の問題は哲学史上絶えず問いつづけられてきた。それはなぜなのか。その大きな理由のひとつは、時間は生成消滅の、とりわけ消滅の原因である(アリストテレス)¹⁾ということと関わりがあるに違いない。新しいものが生成するためには時間の経過が必要である。われわれは時間を待たなければならない。なにごとも時間の到来なしには成就しない。しかしまた、時間はものを古くさせ消滅させもする。時間はわれわれを待たない。なにごとも時間の経過に抗して自己同一性を保持できない。時間は新しい存在・生命の誕生に関わっているが、他方で存在・生命を無・死へと向かわせる。ハイデガーが存在を死への存在、あるいは死に即した存在 (Sein zum Tode) と規定する²⁾とき、そこには時間が深い関わりをもつことが暗示されている。時間の謎は存在・生の謎と深い関わりをもっている。なぜ存在者が存在するのであつてむしろ無ではないのか³⁾、そもそも存在とは何か、などというハイデガーの問いは、時間とは何かという問いと深い関係をもっている。人間存在のすべての可能性と意味がそれにおいて成り立っているところのその存在を無へと晒している時間が、哲学史上絶えず問題とされてきたことはむしろ当然のことであろう。

時間とは何かという問いに対してはすでに様々の解答が提示されてきた。

1) *Physica*, 222b20f.

2) *Sein und Zeit*, II, 1,15.

3) Heidegger, M., *Einführung in die Metaphysik*, S.1, Tübingen 1976.

たとえばつぎのような解答である。時間とは永遠の動く似像である（プラトン）⁴⁾、時間とはより先・より後という観点から見られた運動の数である（アリストテレス）⁵⁾、時間とは魂という生の分散である（アウグスティヌス）⁶⁾、時間は感性の形式である（カント）⁷⁾、真の時間は純粹持続である（ベルクソン）⁸⁾、などである。

さらに、時間とは何かと問われる以前に、そもそも時間は存在するものなのかどうかと問われたこと、そしてそれに対して否定的な答えが示されたことさえ、哲学史上それほど稀なことではない。じつはすでに古代においてアリストテレスがそのように問うていたし⁹⁾、永遠の相のもとに世界を眺めるスピノザの体系¹⁰⁾においては時間が消失しているとも言えるだろうし、現代においてはマクタガートが時間の存在について懐疑的な結論に至った¹¹⁾のはよく知られている。また、われわれは通常「時は流れる」と言うが、「時は流れず」というタイトルで論文を書いた日本の哲学者もいる¹²⁾。「流れない時」を論じることが時間の非存在を論じることに通じる。この世と人生は一時の夢・幻と言われるとき、これは時間の非実在性の表白だとも見なせるであろう。

時間とは何か、時間は存在するか、時間は流れるかといったような、時間にまつわる諸問題は、互いに関連しあっており、はなはだ興味ある問題であるが、本稿ではそれらについては問わないでおく¹³⁾。われわれがここで探求

4) *Timaeus*, 37d5-7; εἰκὼ δ' ἐπενόει κινητὸν τινα αἰῶνος ποιῆσαι, ... τοῦτον ὃ δὴ χρόνου ὀνομακάμεν.

5) *Physica*, 219b1-2; ἀριθμὸς κινήσεως κατὰ τὸ πρότερον καὶ ὕστερον.

6) *Confessiones*, XI, 29, 39: Tempus est distentio vitae (animi).

7) *Kritik der reinen Vernunft*, transzendente Ästhetik, von der Zeit.

8) *Essai sur les données immédiates de la conscience*.

9) *Physica*, 217b30-218a29.

10) *Ethica*, C2, IV P62 Dem, V P22, P23S, etc.

11) *The unreality of Time*, *Mind*, 1908.

12) 『大森荘蔵著作集』第九卷、岩波書店、1999年。

13) 共編著『ネオプラトニカー新プラトン主義の影響史—』所収拙論「永遠と時間—プロティノスからトマスまで—」昭和堂、1998年；共編著『西洋哲学史の再構築に向けて』所収拙論「西洋古代における時間論の四類型—アリストテレス、ストア派、プロティノス、アウグスティヌス—」昭和堂、2000年；共編著『ネオプラトニカー新プラトン主義の原型と水脈—』所収拙論「時間の問題—アリストテレスとプロティノス—」昭和堂、2000年；『九鬼周造の世界』所収拙論「時間と永遠—永遠の現在—」ミネルヴァ書房、2002年、参照。

したいと思うのはつぎのような問題である。通常、時間はいわば直線的に、つまり不可逆的に流れるものと見なされているであろう。「あの時は二度と還らない」とわれわれが言うとき、時間は不可逆だという前提があつてのことであろう。そのような直線的時間観念に対していわば円環的・回帰的時間観念が正当性をもちうるか、つまり可逆的な時間といったようなものがあるか、もしそれが可能であるとすれば、それはいかにしてかという問題である。われわれはまたしばしば「ときは巡る」と言ったりもするのである。

このような問題は西洋においては、とりわけキリスト教的な時間観念、すなわちいわばその先端と末端とにそれぞれ創造の瞬間と終末の瞬間とをもつような時間観念ないしは歴史観念¹⁴⁾が流布して以後の西洋においては、久しく問題自体が忘れられたかのような観を呈していたが、19世紀にニーチェが永遠回帰という思想によって一石を投じて再び関心を惹くようになったのは周知のことであろう。

I 直線的時間と円環的時間

ところで、時間の流れはしばしば川の流れにたとえられる。過去に重点をおいて時間を見るのは、いわば川の流れに身をまかせて自らも流れゆくようなものであり、ベルクソンがいわゆる『時間と自由』において真の時間は純粹持続であるとき、おそらくそのような時間感覚がその基にあったのであろう。いわば自らも川の流れになりきるのである。未来に重点をおいて時間を見るのは、川の流れを遡っていくようなものであり、プロティノスが『エネアデス』において時間を有への魂の憧憬と見る¹⁵⁾とき、またハイデガーが『存在と時間』においてzeitigen, Entwurfなどという術語を用いたとき¹⁶⁾の時間感覚はそのようなものであったにちがいない。手を伸べて流れ

14) Augustinus, *De civitate dei*.

15) *Enneades*, III 7, 4, 19-33.

16) *Sein und Zeit*, I, 5, 13.

を先取りしようと試みるようなものである。それらに対して、「逝く者かくの如きか、昼夜を舍かず」と言った孔子¹⁷⁾のように、川の流れから身を離して岸辺に立ち、一時もとどまることなく流れゆく川を直前に眺めるように、現在に重点をおいて時間を見るひともあろう。アリストテレス、アウグスティヌス、フッサール¹⁸⁾などはそのように、現在に重点をおいて時間を見る。

西洋の時間論史を通覧すると、過去、現在、未来のいずれに重点をおいて時間を見るか、そのような違いがある。しかしそれらに共通するのは、いずれにしても時間が川の継起的な流れあるいは限りなく先へと延びゆく幾何学線のようなものとしてイメージされるという点であろう。つまり時間は一方向に不可逆的に流れてゆくと考えられているであろう。

しかしこのように考えてみることはできないだろうか。川岸に立って、私はつぎのように思いめぐらす。いま眼前を流れる水は大海に注ぎ、水蒸気となって昇天し、雲となって大空を浮遊し、雨・雪となって大地に降り、こうしてもとの大河のもとの流れとして還流する。じつは、いま眼前に眺めているこの流れは、そのようにして、かつて幾度となく廻ったのではなかったか。そして幾度となくこれから。私が眺めているこの状況は、眺めている私を含めて、無限の回帰ではなかろうか。こうして一種の円環構造をもつ回帰的・可逆的時間の観念に到達しないであろうか。

そのような円環的・回帰的構造をもつ宇宙時間がいかにして可能か、われわれは輪廻の論理構造を探究し、その構造を宇宙論的に拡大・適用することによって、その成立根拠を検討してみたい。そしてそのような円環的時間と直線的時間とがどのような関係をもつのかについても触れることになる。

II 輪廻 (Metempsychose) と再生 (Palingenesie)

紀元前 6 世紀頃、ほぼ同時に、東洋 (インド) と西洋 (ギリシア) におい

17) 『論語』第九、子罕篇。

18) Aristoteles, *Physica*, IV: Augustinus, *Confessiones*, XI: Husserl, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, Husserliana, X.

て輪廻 (samsāra, μετεμψύχωσις) の思想が現れた。バラモン教とピュタゴラス派においてである。東洋においては輪廻の思想はバラモン教から仏教に受け継がれ、それは善因楽果、悪因苦果という根本原則、つまり因果応報という原理によって人間の差別化を正当化する側面をもつ思想として批判を受けつつも、今日に至るまで絶えていない。西洋においては、輪廻の思想はとりわけキリスト教の思想家たち、たとえばボナヴェントゥラなどによって厳しく批判され¹⁹⁾、すでに久しい以前からその影響力を失っていたように思われる。

しかし輪廻の思想および回帰的時間の観念が西洋古代世界によく知られていたことは伝承や断片から窺われる。ヘラクレイトスにそれらしき思想が見受けられ、またディオニソス・オルフェウス教団にもあったようであるが、ピュタゴラス派には明確なかたちでそれをみとめることができる。プラトンのいわゆる「完全年」あるいは「大宇宙年」という思想²⁰⁾はピュタゴラス派から継承したものであろう。プラトンが『パイドン』において魂の不死論証を試みたのもピュタゴラス派との接触を経てであったと言われる。おそらくピュタゴラス派の魂の輪廻説にふれる機会があったであろう。周知のように、回帰的時間の観念はニーチェのいわゆる永遠回帰の思想として再生する。ピュタゴラスが通りがかりに子犬のぶたれているのを見て、「よせ、ぶつな、友人の魂だ、泣くのを聞いてそれとわかったのだ」と言ったという。これはピュタゴラスの輪廻思想を告げるものとして有名なエピソードであるが、ニーチェもツァラツストラにそのことばを語らせている。²¹⁾ 回帰的時間の観念に通じるといえる思想はじつはすでにストア派において究極的なかたちをとって現れていた。²²⁾

19) *Commentarii in quattuor libros sententiarum*, II, 1, 1, 1, 2.

20) *Timaeus*, 39d.

21) *Also sprach Zarathustra*, vom Gesicht und Rätsel.

22) *Arnim, Stoicorum veterum fragmenta*, II, 625.

ストア派の人々はつぎのように言う。……ソクラテスやプラトンといった各々の人間は、同じ友同じ市民とともに再び存在するであろう。かれらは同じ目にあい、同じことを為すだろう。……万物の復帰は一度ならず何回も生じるだろう。いやむしろ、同じものが無限に、終わることなく復帰するだろう。……前に生じたものと何も変わったものはなく、万物がその細部にいたるまで (ἀχρι τῶν ἐλάχιστον) まったく同じ不変の状態で存在するだろう。

ショーペンハウアーは古代ギリシア哲学に造詣が深く、仏教にも関心を寄せていた哲学者であるが、ピュタゴラス派やバラモン教の説くような輪廻思想とストア派の断片に現れたような再生思想とはそれぞれ根本的に異なる思想として区別すべきであると言う。すなわち輪廻思想は魂の輪廻転生を説くが、再生思想は魂のみならず万物がその細部にいたるまで無限回回帰・再生することを説くというのである。²³⁾ しかしわたしは両思想は全く異なる思想として区別する必要はないと思う。むしろ両思想には密接な関係があるのではなかろうか。つまり輪廻思想の論理を徹底・拡大してゆけば再生思想に行きつくのではなかろうか。

さらに、『旧約聖書』の「伝道の手紙」(1, 2—10) のなかには一見ストア派のこの万物再生の思想に類似するつぎのような表現が見られる。

伝道者は言う、
空の空、空の空、いっさいは空である。
世は去り、世はきたる。
日はいで、日は没し、
その出た所に急ぎ行く。
川はみな、海に流れ入る、
しかし海は満ちることがない。
川はその出てきた所に帰って行く。

23) *Parerga und Paralipomena*, II 10, 7.

先にあったことは、また後にもある、
先になされたことは、また後にもなされる。
日の下には新しいものはない。
「見よ、これは新しいものだ」と
言われるものがあるか、
それはわれわれの前にあった世々に、
すでにあったものである。

しかしアウグスティヌスによれば、これは異教の哲学者たちが主張するような厳密な意味での万物再生、つまり万物がその細部にいたるまで厳密に同一性を保ったまま繰り返すということをではなくて、類似のできごとが繰り返し現れるということを言いたいのだという。²⁴⁾ キリスト教の思想家アウグスティヌスのこの「伝道の書」の語句の解釈は、逆にギリシアの哲学者たちの万物再生思想がどのようなものとして受け取られていたかを告げるとともに、それがキリスト教思想とはどうしても相容れないものと見られていたことをも示している。

そして、ストア派の断片は、時間そのものの回帰をではなくて、無限に直線的につづく時間のなかで有限数の事物の同じ組み合わせが繰り返し現れることを言っていると解することもできるかもしれない。アウグスティヌスもそのように解して異教の哲学者たちの再生思想を批判している。終わることのない時間とそのなかでの同じことの繰り返し。またしても、またしても、結局同じことの無限の繰り返し！そこには救いがないとアウグスティヌスは言う。しかしわたしは、ストア派の断片がアウグスティヌスの解するような意味を含んでいたにせよ、そうではなかったにせよ、再生の思想はその論理を徹底してゆけば、単に事物の存在だけではなくて時間自体が事物の存在ともども厳密に回帰するという思想に帰着すると思う。そうでなければ、万物

24) *De civitate dei*, XII, 12et14.

は回帰するたびごとにいわば1回帰年ずつ加齢することになり、厳密な意味では同一のものが回帰するとは言えなくなるだろうからである。「細部にいたるまで」というのはそういうことでなければならないだろう。ニュートンのいわゆる「絶対時間」のように、時間は空間とともに、そのなかに事物が含まれ、そのなかで事物が運動するが、それ自体は事物の存在とは独立の、ある種の枠組みのようなものではないであろう。

要するに、①輪廻思想はその論理を徹底・拡大してゆけば、万物再生思想へと展開し②万物再生とは、万物が完全な同一性を保ったまま回帰することであり③その回帰には時間の回帰も同時に含まれている。

輪廻の思想は、ギリシア語(μετεμψύχωσις)にも示されているように、たしかに本来は魂の輪廻転生に関わるものであろうが、その思想の根底に潜む論理を徹底し拡大してゆけば、たんに魂が輪廻転生するというだけではなく、魂も含めて宇宙(万物)が全体として時間とともに無限に回帰するという思想に行きつくであろう。しかも魂の輪廻転生において、輪廻転生する魂は厳密に自己同一性を保持しつづけるように、この回帰する宇宙は、たんにそれ以前に無限回回帰した、またそれ以後に無限回回帰するであろうはずの宇宙と類似の宇宙というのではなく、厳密に同一の宇宙である。この桜の一枚の葉も流れゆくあの雲も、完全に同じ姿で回帰する。「種において同じもの」がではなく「個として同じもの」がすべて「その細部にいたるまで」同一性を保ちながら無限に開始し、終わり、そしてまた開始し……といったように。

Ⅲ 輪廻の論理構造

そもそも「輪廻」とは何か。輪廻思想はどのような論理構造をもつのか。因果性という観点から考えてみよう。原因と結果の関係については二つの解釈が可能である。総合的解釈と分析的解釈とである。たとえば $\langle 2\text{H} + \text{O} \rightarrow \text{H}_2\text{O} \rangle$ という簡単な化学式を例にとってみよう。左辺を原因として右辺の結

果が生じるわけであるが、一つの見方として、じつはそこには何の変化も生じていないとする解釈（分析的解釈）もありうる。なぜなら、右辺（結果）にはもともと左辺（原因）にあった水素原子2個と酸素原子1個以外のものは何もないからである。原因のなかになかったものは結果のなかにはないし、原因のなかにあるものが結果のなかにはないということはない。同じことになるが、結果のなかにあるものはすでに原因のなかにあったのであり、結果のなかにはないものは原因のなかにもなかったのである。要するに、原因は結果に等しい（*causa aequat effectum*）。AはAであるという論理である。生成消滅の世界を臆見（*δόξα*）として否定し、同一性の世界の実在性のみをみとめるエレア派の見方はこのような見方の典型であろう。

もう一つの見方（総合的解釈）は、左辺は気体（水素と酸素）であるが右辺は液体（水）であり、気体と液体とはまったく別のあり方であって、左辺になかったものが右辺に生じ、左辺にあったものが右辺にはないと見る。生成消滅をみとめる見方であり、万物は流転すると言うヘラクレイトスの見方はその典型であろう。

ところで、輪廻転生は因果応報の原理によると言われる。輪廻のこの因果性はどのように解すべきか。ピュタゴラスの上の断片によれば、ピュタゴラスの友人、つまり人間が子犬に転生しているというわけであるが、これは一見、人間という存在が子犬というまったく別の存在に変化したことを言っているように見える。これはちょうど上の化学式で、気体から液体が生じているのを見て、そこにまったく新しい別のものが生成したとみる見方に当たるといってよいであろう。しかし果たしてそうなのか。変化と見えるものの根底には、じつは同一のものが不変に自らを維持しているのではないか。

ある人間がもし鬼に転生したとすれば、その人間はもともと鬼のような人間だったのではなかろうか。いや、もっと正確に言えば、その人間はまさに鬼だったのではあるまいか。無からは何も生じないはずであり、生じたのであればそれはすでにあったのでなければならない。原因は結果に等しい。輪

廻転生の思想の根本論理はこのような因果性の見方ではなかろうか。つまり同一性、必然性の論理である。そうすると、輪廻転生のもっとも徹底したかたち、あるいはその典型的な例は、たとえば人間が犬に転生するなどといったような場合ではなく、ある人間がまったく同一のその人間に、私がまったく同一のこの私に転生する場合であるということになろう。ソクラテスやプラトンといった各々の人間は、同じ友同じ市民とともに再び存在するであろう。万物がその細部にいたるまでまったく同じ不変の状態で存在するだろう。

輪廻思想の根底には同一律としての因果律がある。輪廻転生の世界は徹底的に同一律によって支配される世界である。善人はけっして悪人に、悪人はけっして善人にはなれないであろう。かりに輪廻にその開始点があったとすれば、すべてのものはそこで始まったあり方を根本において変えることはないし、また変えることもできないということになろう。神を殺した者でも根本においては善人、神に酔える者でも根本においては悪人ということもありうるかもしれない。それは人間の意志の入り込む余地のない過酷な思想、救いのない思想なのかもしれない。

事実バラモン教および仏教における輪廻思想においては究極的な救済、永遠の至福への道は完全に断たれている。もちろんバラモン教においては、個的魂・アートマンが絶対者・ブラフマン（梵）と実は同一のものにほかならないことを悟ることによって、また仏教においても、煩惱、とりわけ愛欲を断ち、無知を克服することによって、輪廻転生のくびきから脱することができると説かれる。しかし輪廻の思想そのものには救済への可能性はまったく含まれていない。アウグスティヌスがギリシアの哲学者たちの再生思想を批判したのも、結局、それは希望のない絶望的な思想だということ、つまりそこには救済がないという理由からであった。輪廻・再生の思想によれば、一度悲惨な生から至福の生に至ったとしても、それは一時の、仮初めの至福であって、たちまちにして再び悲惨な生へと堕ちなければならないであろう。そのような輪廻転生を無限に繰り返すことになろう。同じことの無限の繰り返し

返し。こうしてひとは、そのような終わりのない「廻転遊戯」に翻弄されながら、永遠の至福にとどまることはついに断念しなければならないことになろう。キリスト教の思想家アウグスティヌスから見れば、これはわれわれ人間にとって最悪の、恐るべき帰結だということになろう。²⁵⁾ そのような帰結を避けるためには、アウグスティヌスによれば、できごとと時間は、回帰的ではなく不可逆的にいわば日々新たでなければならず、終末がなければならぬと考えるほかないであろう。終末とは救済の約束のときである。しかしそのような、無限回帰する世界と生をありのままに肯定し引き受ける意志・勇気はわれわれにはないのか。

同一のものが無限に回帰・反復するという輪廻転生思想の根本論理を宇宙全体に拡大適用すれば、回帰的時間あるいは永遠回帰という観念に到達するであろう。それはどのようなものと考えられるべきか、またそのようなものはいかにして可能か、検討してみたい。

IV 永遠回帰—永遠の今—

回帰ないしは反復の観念はわれわれの日常経験から容易に生じるであろう。われわれが、四季の廻りや天体の周期的な運動といったものから、時間そのものが円環構造をもっているのではないかという想いに到るのはごく自然なことであろう。祝祭や農耕、社会行事などにおいて広く使われている「周年」ということばは、そのような日常経験から得られた観念に当てられたものであろう。しかし厳密に言えば、「周年」という言葉を使うわれわれでさえ、それは形式的な回帰年であって同一内容の回帰ではないということを承知しているはずである。毎年「春夏秋冬」は廻ってくるが、それぞれの年のそれぞれの内容は類似してはいても厳密には同じではない。この桜の木もすでに一年を経ており、同じ木とは言えない。私も一年を経た。それゆえ、われわれが通常「回帰」「反復」「周年」などと言う場合、それはいわば「螺旋構造」

25) *De civitate dei*, XII 14.

によってイメージされうるようなものであり、これは「円環構造」とは厳密に区別されなければならない。「螺旋」はイメージとしては「円環」に近いものとして表象されるかもしれないが、論理的にはじつは「直線」に近い。つまり螺旋は直線と同じように、先に進むほどにその開始点から遠ざかってゆくのである。しかるに円の場合、出発点から発した曲線は先に進むほどに出发点に近づき、結局出发点が終局点になる。このような、出发点が終局点でもあるような円環構造をもつ時間、言いかえれば可逆的な時間をいま考えようとしているわけである。

たとえば私が大地を歩きつづけることができるとしよう。私にはどこまでも、前方も後方も、水平的・直線的に見えるであろう。歩けば歩くほど私の出発点は次第に背後に遠ざかり、出発点に帰るにはいま来た道をとって返さなければならないと思われるだろう。大地が事実どこまでも水平的・直線的であるとすれば、そうしなければ帰れないだろう。出発点は歩けば歩くほど遠くなる。しかし、小さな私にはどこまで歩いても水平的・直線的にしか見えないこの大地が、じつは大きな球体的一部分であるとすれば、先へ進めば進むほど出発点は遠くなるのではなくて、逆に出发点へ向かって、私はこれへと接近しつつあることになる。出発点は背後にあるのではなく前方にある。出发点が同時に終局点でもあることになる。

ちょうどそのように、いわば球体的時間とでもいったものを考えてみるのである。私が時間をいわば歩きつづけることができるとしよう。私の出发点（過去）は次第に背後へ遠ざかるように思われる。過去は未来の対極にあり、私が歩きつづければその距離はいよいよ大きくなるように思われよう。時間はどこまでも水平的・直線的に見えるだろう。時間が事実どこまでも水平的・直線的であるとすれば、私の出発点は遠くなるほかないだろう。しかし、小さな私にはどこまで歩いても水平的・直線的にしか見えないこの時間がじつは大きな球体的・円環的構造を持つ時間の一部分であるとすれば、先へ進めば進むほど出発点は遠くなるというのではなくて、むしろ出发点へ向かってこ

れに接近しつつあるということになる。出発点は後方（過去）にあるのではなくて前方（未来）にある。未来は過去を向いている。出発点は遠く背後に退きつつ前方に近づく。要するに、出発点（過去）が同時に終局点（未来）でもあるということになる。

もちろん、時間の本質はまさに不可逆性ということにあるのだから、そのような時間の観念はもはや「時間」とさえ言えないのではないかという反論があろう。出発点が終局点でもあるような構造をもった時間においては、過去が同時に未来でもあれば現在でもあり、現在が同時に未来でもあれば過去でもあり、未来が同時に過去でもあれば現在でもあるということになり、これはわれわれの日常経験からは到底理解しがたい時間観念であると言われよう。たしかにそのような時間観念は経験からの帰納の結果として得られるようなものではない。そのような時間観念を得るためには経験の領域から形而上の領域への思考上の飛躍が必要である。ストア派の断片に現れた再生思想の論理をさらに究極的な次元にまで徹底して得られるはずの、万物のみならず時間も回帰するという回帰的時間の観念は、経験論からの帰結ではない。われわれはいまストア派のそのような観念を結論ではなくて仮定とみなすのである。一切がその細部にいたるまで完全に回帰するという仮定から出発するのである。そのような回帰的時間はどのようなものでなければならないか、またいかにして可能か、事実問題（*quaestio facti*）ではなく権利問題（*quaestio juris*）を問おうとするのである。

もし時間が直線構造ではなく、また螺旋構造でもなく、完全に始点と終点とが一致するような円環構造をもつとした場合、一つの円環が閉じるときどのようにしてつぎの円環が始まるかという問題が生じる。厳密に回帰・反復する時間の観念は唯一の完全な円環構造によってイメージされなければならず、たとえば鉄線で作られた同じ半径をもった多数の円を重ね合わせて、それを真上から見たとき完全に一つの円に見えるが、これを一つ一つ取って並べると多数の完全に同じ円が目の前に展開するといったようなイメージであ

ろう。一が多であり、多が一であるような、あるいは一即多、多即一であるような円環構造をもつ時間である。しかし厳密にはそのイメージもまだ適切ではない。重ねられた同じ半径をもった鉄線の円は、たしかに真上から見れば一つに見えるが横から見れば多数であって厚みがある。それを一つ一つ取って並べたときに「つぎつぎに」nach und nach²⁶⁾ 展開する円環には順に継起番号がつけられるであろう。つまりそれぞれの円環には区別があり1, 2, 3, 4, ……といった継起の順序の番号に従って各円環のあいだには不可逆の関係があることになる。それゆえ、無限回回帰する厳密に同一の時間は、もしそれをイメージとして想い描くとすれば、ただ一つの円として表象されなければならない。しかしそれがただ一つであるとすれば、どうして回帰・反復できるのか。言いかえれば、どうしてまったく新たに円環を開始しうるのか。

たとえばわれわれが「ここに同じ二枚の桜の葉がある」と言うとき、これは厳密には「ここに同じ種類の二枚の葉がある」という意味である。「厳密に同じ」であればその葉は「二枚」ではないし、「二枚」であればその葉は「同じ」ではない。つまり、われわれのこの経験的世界には、「種」としてではなくて「個」として「厳密に同じ二枚の葉」といったようなものは存在しないと思われる。この世界は無限の個的差異性を内包する体系であり、そこには個として厳密に同じものは存在しない。同じであればそれは「この一つの個」であり、二つであればそれは同じ個ではありえない。ライプニッツのいわゆる「不可識別者同一の原理」le principe de l'identité des indiscernables²⁷⁾ は、この世界をそのような差異性の世界、個物の世界として見る原理である。いま回帰的時間について問題になっていることは、ライプニッツのこの原理を超えた世界の存在の可能性についてである。「個として厳密に同じ二枚の葉」の存在の可能性、アイデアがそのまま無数の個であるような可能性が問わ

26) Vgl., Kant, *Prolegomena*, Felix Meiner Verlag Hamburg 1976, S.17.

27) Vgl., Leibniz, *Discours de Métaphysique* 9.

れている。いわば個として一周回する時間がそのまま無限回反復しうるか、それはいかにして可能かという問題である。問題の焦点は、厳密に同一の個としての円環的時間が繰り返すときの、その「新たな」円環の始点と前の円環の終点との関係に絞られる。

前の円環の終点とつぎの円環の始点とは連続的であってはならない。両円環は個として完全に同じ円環でなければならないが、つぎの円環が完全に新しく始まると言いうるためには一度、両円環のあいだにいわば完全な「切れ」あるいは「断絶」がなければならない。一度完結（断絶）しなければ、完全に新たな円環を開始することはできない。通常われわれが「新しい一年の始まり」と言うとき、それはある時点でわれわれの意識を新たにすることであって、去年と今年の間そのもののあいだに「切れ」があるということではないであろう。時間そのものは連続しているはずである。われわれがここで問題にしているのは意識の更新ということではなくて時間そのもののあいだの「切れ」である。

しかしまた完全に断絶したものであれば、同じものが同じ時点から開始することはできないであろう。前の円環が完結したその終点が同時につぎの円環の始点にならなければならない。そうでなければ別の円環が始まることになるだろう。両円環が個として同じであるためには、終点がそのまま始点でなければならない。その意味で両円環は連続していなければならない。個として完全に同じ円環がまったく新しく始まるためには、そのような「断絶の連続」あるいは「断絶即連続」とでも言うべき弁証法的関係が回帰・反復のなかにみとめられるのでなければならない。

しかしもしそのように厳密に個として同じ時間が繰り返すとすれば、すなわち、いわゆる「周年」という観念のようにたんに形式的にというばかりではなくて、内容的にも厳密に同じ時間が回帰・反復するとすれば、「繰り返す」ということさえ言えないのではなかろうか。おそらくその通りであろう。厳密に繰り返しているのであるから、われわれの経験としては、「前の」一

廻りの時間系列と「いまの」一廻りの時間系列と「あとの」一廻りの時間系列とを区別することはできないであろう。いまこうして出会っている私たちはかつて無限回出会ったことがある。これからも私たちは無限回出会うであろう。この部屋は、この机は、どの時間系列においても厳密に同じである。かつてこの世界は厳密に同じ状況において無限回存在した。これからも無限回存在するであろう。「前の」時間系列が「現在の」時間系列に繰り返され、「現在の」時間系列が「あとの」時間系列に繰り返される。それゆえ、過去が未来に、未来が過去に、現在が過去に、過去が現在に、そして未来が現在に、現在が未来になる。完全に「円環」のかたちをもった時間である。

私たちと世界はその細部にいたるまで厳密に同じ状況で回帰する。厳密に同じ状況が回帰しているのであるから、「いま」のわたしたちの存在・行為が「繰り返し」あるいは「反復」であるということは自覚されないだろうし、また事実上それとして区別することもできないだろう。つまり、事実上は繰り返しのできない「一回かぎり」の、「唯一」の存在・行為として現れているのである。この人生、この世界以外に人生、世界はない。そしてこれもまたその通り真実であろう。無限回厳密に繰り返す時間と厳密に一回限りの時間とが不思議な一致をみる。無限回繰り返す時間は同一性をその本質とし、一回かぎりの時間は差異性をその本質とする。同一性と差異性とが一致するのである。差異性が無限に反復することによって同一性を生み出すと言ってもよい。言いかえれば、時間のそのつどの「今」は無限の深みをもったものであるということである。いわゆる「永遠の今」とはこのような、無限の深みをもったそのつどの「今」のことであろう。「永遠の今」とは、永遠が時間のそのつどの今において現象しているといったようなことではない。プラトンの術語を使って言うならば、「永遠は時間の原型であり、時間は永遠の動く似像である」ということではなくて、時間の無限の反復が永遠になる、あるいは永遠を生むということである。かりに差異性を特徴とする一回かぎりの時間系列を「水平的」なイメージで表象し、同一性を特徴とする無限回

帰の時間系列を「垂直的」なそれで表象しうるとすれば、真の時間の構造は「水平的脱自」と「垂直的脱自」との交差において成立しているであろう。その交差点が「いま、ここ」という、われわれの生の現場にほかならない。人生と世界は一回かぎりのものである。ひとは少年、青年、壮年、老年という時期^とを経る。しかしそれらはそのときどきに無限の深みをもった時期である。かりに人生八十年とすれば、われわれには八十回だけの春夏秋冬しか与えられていない。しかしそれもそのつど限りない深みをもった春夏秋冬である。してみれば、春の芽吹き、夏の灼熱、秋の紅葉、冬の雪化粧、そしてまた一木一草、出逢われるものすべて、いずれもが「一期一会」といったような、すべてが限りない意味をもった、いとおしい季節^と・できごととして立ち現れてくる。仏典『浄土論』では、われわれと他者・世界との出逢いは「遇無空過者」と表現されている。時間はたしかに消滅・別離の原因でもあるが、生成・邂逅の原因でもあるのである。悲しみの原因でもあるが、喜びの原因でもあるのである。

われわれは、輪廻思想と再生思想との関係を問い、前者の論理を徹底・拡大してゆけば後者に帰着すること、輪廻・再生思想の根本論理は厳密な同一性・必然性の論理であること、そして輪廻・再生の時間構造は厳密な円環的・回帰的構造であることを確かめた。また、円環的・回帰的時間、つまり可逆的時間が何らかの実在性をもつとすればそれはどのようなものでなければならぬか、さらにそれは直線的・不可逆的時間とどのような関係をもつのか、そしてそれは世界と生にとってどのような意味をもつのか、検討した。

ストア派の断片に現れた万物再生の思想は、アウグスティヌスがそれを批判する文脈から推察されるように、不可逆的に無限につづく時間の経過のなかで、類似のものが無限回反復するというのではなくて、厳密に同一のものが反復するということを意味していたであろう。しかし、われわれは、再生思想の論理をさらに徹底すれば、万物のみならず時間そのものも可逆的・回帰的構造をもって反復するという思想に到達するであろうと見なし、そのよ

うな構造をもつ時間の実在の可能性を問うたのである。一回かぎりの時間系列と無限回繰り返す時間系列との関係をあらためてつぎのようなイメージで示すことによって本稿の締め括りとしたい。

一個の「無限球」といったようなものを考える。その球面に同じ半径をもった無数の「周円」をとる。それらを、個として厳密に同一でありながら厳密に区別される無数の回帰的時間と考えることができる。アイデアとしての唯一の円がそのまま無数の個的な円として展開している。球の「中心」は回帰的時間の、前後を持った全行程を産出する源泉 (Urquelle) であり、各回帰的 (水平的) 時間の「同一時点」を定める。球の中心から球面の無数の周円へ無数の垂直線を延ばしてみればよい。

【付記】

本稿はミュンヘン大学のヨハネス・ラウベ教授の退官記念論文集 (Festschrift für Johannes Laube) *Wandel zwischen den Welten* (Peter Lang Verlag, 2002) 所収の拙論 *Ewige Wiederholung—die Struktur der Zeit der Metempsychose und Palingenesie—* とほぼ同内容の日本語原稿である。もちろん「永遠回帰」 *ewige Wiederholung* はニーチェの中心思想でもあるが、本稿ではニーチェとはまったく異なる観点から「永遠回帰」の思想に論理的根拠づけを試みた。本稿に論じられたことは、基本的には共編著『西洋哲学史の再構築に向けて』（渡邊二郎監修，昭和堂，2000年）に収められた拙論「西洋古代における時間論の四類型—アリストテレス，ストア派，プロティノス，アウグスティヌス—」の後半ですでに検討されているが、本稿ではより広い視野のもとに再論した。なお、本稿の着想は九鬼周造の短編中の白眉「形而上学的時間」から得ている。九鬼論文と拙論の相違は、九鬼が内容（できごと）を捨象した時間の回帰を問題にしているのに対して、拙論は時間とともに内容も含めた回帰を問題にしているという点にある。九鬼論文および『九鬼周造の世界』（坂部恵他編，ミネルヴァ書房，2002年）所収拙論「時間と永遠—永遠の現在—」をも併せて参照されたい。